

教育と文化

No.116

平成30年3月1日
公益財団法人
愛知教育文化振興会
岡崎市明大寺町字馬場東170番地1
電話 0564-51-4819

三河教育の矜持

公益財団法人愛知教育文化振興会 副理事長 白井博司



今から十年前前に一冊の本を購入しました。「学校は教師たちが学び育ち合う場所でもある。学校を改革するためには、すべての教師が授業を公開して、専門家として成長し合う同僚性を校内に築かなければならない。私は、教室を閉ざしている教師を公立学校の教師として認めない。なぜなら、その教師は、どんなに素晴らしい実践を展開したとしても、子どもを私物化し、教室を私物化しているにすぎないからである。子どもの学びを一人残らず保障するためには、教師はとも

に教室を開いて実践者としての連帯を形成しなければならぬ。」(『教師たちの挑戦』佐藤学著)
「主体的・対話的で深い学び」が求められ、改めて授業論に脚光を浴びつつある昨今、私は、どうしてもこの文章に惹かれます。
三河には、先輩たちによって構築された、三河風土に根ざした質実にして剛毅な教育の伝統があります。
その伝統の一つの視点に授業研究が挙げられます。子どもの経験を大事にし、子ども自らの学びを図ることは、三河の伝統的な指導の構えでもあります。授業研究では、授業記録や学習記録をもとに、一人一人の子どもが、学びの対象に迫っていく道筋をもっているかを確かめていきます。子どもたちが学んでいる姿のなかに、一つ一つの対象をじっくりとらえていく力や友だちにかかわっていく力が

どのように育っているか、見続けることを大切にしています。

私自身も実践を進めるなかで、先輩諸氏から「子どもの表情の変化や発言の背後にある子どもの考えを読み取ろうとしているか」「教師が、一人の人間として平等な態度で子どもに対するならば、自分にとって都合の悪い言動に対しても謙虚にとらえ直せるし、思いもつかなかつた言動に対しても人間として対応できる」と厳しく言われてきました。それは、子どもをとらえ、とらえ続ける日頃の営みの重みを痛感する日々でもありました。もう一つの視点は、様々な課題のなかで、「子どもと主体とする授業が展開できるほど、学びの場が具体的にになっているか」という視点で検討し続けてきたことです。それは、実践でしか身に付けることができない、教育という仕事のもつ特質によるものではないでしょうか。いずれにしても、実践を深めるには実践を積み重ねるしかありません。子ども一人一人を「この子」と呼べる次元まで授業を具体化することができるとき、戸惑って模索したり、新しいことを見つけて小躍りしたりする、子どもの姿が見えてくるでしょう。
そうした授業を可能にする子どもの側に立った教材開発と、その展開を工夫していく営みが三河の教育の根底に流れてきたのではないのでしょうか。今後、授業研究の形態が変化しようとも、この二つ

の視点を大切にして、子どもの事実に学びながら研究が進むことを望みます。

冒頭の「専門家として成長し合う同僚性」は、まさに三河の教育の伝統に通じるものがあります。校内での同僚性が基底となり、郡・市、そして三河というなかで切磋琢磨し合い、伝統を受け継いでいきたいものです。

もくじ

巻頭言

三河教育の矜持

白井 博司

三河教育への提言

三河のお家芸

花井 隆

随想

学校文化の伝承

伊藤 映充

三河の文化を訪ねて

煎茶文化のふるさと八橋

中野 俊昭

平成二十九年度かきぞめコンクール

ネイチャーウォッチングに参加して

俊昭

平成三十年度版刊行物の紹介

刊行物を活用した授業

せいかつかノート

平成二十九年年度個人研究助成

審査を終えて

せいかつかノート

平成二十九年年度教育図書出版助成

教室の窓辺

神谷 佳孝・阪口亜希子

郡市の特徴ある取り組み

高浜・みよし

学校教育ボランティアグループ活動紹介

行事予定・編集後記

行事予定・編集後記

三河教育への提言

三河のお家芸

田原市教育委員会教育長 花井 隆



名も知らぬ 遠き島より

流れ寄る 椰子の実一つ

故郷の岸を離れて 汝はそも 波に幾月

これは、作家であり、詩人でもある島崎藤村が詠んだ『椰子の実』の冒頭です。民俗学者柳田國男が伊良湖岬に滞在したとき、浜に流れ着いた椰子の実の話を藤村に語り、藤村がその話をもとに創作しました。

柳田國男がどのように伝えたのか興味深いところですが、柳田の感性が藤村を刺激して、このように旅情や郷愁を漂わ

以下、三つの視点から学校教育に対する思いや考えを述べたいと思います。読者の感性が働き、少しでも何か感じるこ

言語能力を培う

「中高生の読解力やばい」の記事が、十一月末の新聞に載りました。主語と述語の関係など、文章の基本構造を理解できていない中高生が多く見られるという調査報告が出されたためです。また、全国学力・学習状況調査の結果では、読む活動において内容理解や物語の読解に課題があるという結果が出ています。

読解力の問題は、中高生に限らず、社会全般における傾向になっています。とりわけ、若年層においては深刻さを増しています。その原因はいろいろと考えられますが、テレビ視聴時間の増加、ゲームやパソコンの浸透、携帯電話やスマホなどの通信手段の進歩などが挙げられます。そうした映像・画像への依存が、文字文化を隅に追いやり、五感を通じた伝達に困難性が増しています。

教育学者の齋藤孝氏は、著書『声に出して読みたい日本語』で、「歴史のなかで吟味され生き抜いてきた名文、名文句を声に出して読み上げてみると、そのリズムやテンポのよさが身体に染み込んでくる。そして身体に活力を与え、心の力

につながってくる。」と述べています。

私が中学生や高校生のように読んだ本や覚えた名文（古文や漢文を含む）の朗読や暗誦は、今でも脳裏に焼きつき耳に残っています。言葉に対する感性が、五感を通して自ずと高まっていくように思います。齋藤氏のこうした日本語に対する考え方に耳を傾け、今一度、読解力の向上をめざした学習の見直しや改善が真に求められるべきです。

また、「文章作成・記述力」は、読解力と密接に関連しています。昨今の情報通信機器によるコミュニケーションは、作文力の低下を招いているように思います。情報通信機器の便利さを否定しているわけではなく、そこに潜んでいる危機感を訴えたいと思います。はがきや手紙を書くことやあれこれと想像を巡らせて文章を書くことなど、作文力向上の取り組みはたいへん重要です。

全国俳句甲子園決勝で、幸田高校は東京の開成高校と大熱戦を繰り広げました。幸田高校の健闘からは、俳句に寄せる熱い思いと今までの努力の積み重ねが想像できます。多くの小中学校で取り組んでいる俳句や川柳、短歌などの学習が実を結んでいます。子どもたちの感性が輝く場面をどう作るかが肝心です。現状における問題点に対応した、真摯で粘り強い言語活動の取り組みを期待します。

問題解決能力を高める

秋の深まりを実感する頃に、愛知教育大学附属岡崎小学校（以下附岡小）の研究図書『自らの意思で判断・決定していく子ども』が発刊されました。附岡小は明治三十四年の開校以来、生活教育の理念のもとに、その伝統を継承しつつ、この五年間の研究成果をまとめました。森校長は、子どもたちが学ぶ理由に、「子どもたちのなかに問題が発生しているか」を問われています。

そこで、子どもたちの中の問題を問う前に、「大人の問題意識はどうなっているか」について考えてみますと、大人の目の前の問題に対する認識が、様々になってきているように感じます。したがって、教員の中でよく使われる言葉である「共通理解」が難しくなっています。多様な価値観があるなかで、様々な個性を生かす時代であるとはいえ、問題に対する共通理解が容易でない状況が見受けられます。なかには、問題を問題として捉えられない、目の前の問題に気づかないなど、旧来からあつた状況が顕著になっています。すなわち、問題意識や共通理解についての認識の状況は、深刻さや厳しさを増しているといえます。

そういった現状を分析する中で、附岡小の研究図書の副題「問題解決学習×自

覚×教師支援」を見るにつけ、求める子どもの姿「自分なりの思いや考えをもち、よりよい判断・決定をしながら、学びを深めていく子ども」は、今日的な課題に応える研究になっています。

社会人と呼ばれる大人たちが、日常生活の中で問題解決ができなくなっています。それは、「ゆとり世代だから」という言葉で片づけるのではなく、現実を直視した分析や考察ができないことに起因しているのではないのでしょうか。問題に対する正確な分析や深い考察が、よりよい判断や決定につながり、さらなる学びを広げたり深めたりしていきます。こうした一連の学びの流れを真摯に受け止めることが、良質な経験となっていくます。指導者自身が問題解決学習についての認識を高め、経験を積み重ね、指導方法の確立をめざされることを切に願っています。

広く深く学ぶ

平成三十二年度から実施される新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」がキーワードの一つとして挙げられています。前回に続いて新学習指導要領策定の中心となった文科省の合田教育課程課長（現内閣府）は、

「人工知能がどんなに進化し思考できるようになったとしても、その思考の目的

を与えるのは人間である。目的のよさ・正しさ・美しさを判断したり、複雑な状況変化の中で目的を再構築したりする力が人間のもつとも大きな強みである。皆で学び合い、知識や経験を共有することで新しい知恵を生み出すという教育活動は、我が国の学校のお家芸である。これまでの教育実践の蓄積を若手教員にもしっかりと引き継ぎつつ、授業を工夫・改善してほしい。」

と述べています。この言葉には、我が国の教育や先生に対する期待感が凝縮されています。

まず、キーワードの「主体的な学び」は講義のような授業からは育ちません。「何のために学ぶのか」という学習の意義を押さえて、目の前の子どもたちに応じた授業の工夫・改善が大切です。子どもたちの主体性は自然に身につくのではなく、様々な学習や生活を通して身につくものです。子ども自身が問題を見つけ、解決できるような授業が必要です。

次に、「対話的な学び」は子どもたちによる学び合いの場です。新たなスタイルを求める必要はありませんが、現在行われている授業が表面的でなく、真に対話的であるかどうか、成果や課題を冷静に分析して、今後どのように具体的にしていく研究が大切です。

そして、三つ目の「深い学び」では、

各教科に特有な見方・考え方が重要です。私が二十数年前、附岡中に勤務していた時に、研究図書『生き方を学ぶ教育 21世紀を託すことのできる地球市民の育成』を発刊しました。当時の教育研究では、九教科で育てたい「価値あるものの見方・考え方」を洗い出しています。この「価値あるものの見方・考え方」が、子どもたちに身についたかどうかの検証が難しかったのですが、この「深い学び」をどう評価していくのが、三つの中では一番難しいと思われる。今後、この深い学びをどのように行っていくか、教師の力が試されるでしょう。

毎冬の日本の風物詩に「駅伝」があります。三河は駅伝が盛んなところです。駅伝はチームの仲間が、一本の襷（たすき）をスタートからゴールまで繋ぎます。一人一人の走る思いとそれをつなげる心意気を襷に託しています。子どもたちがこれから生きていく未来に向けて、三河の教育にかかわるベテランも若手も、駅伝の襷を繋ぐように、その心意気を結集し、一人一人が自覚と責任をもった指導を心掛け、チーム全体が質の良い指導を積み重ねていくことが「三河のお家芸」であります。今こそ三河の教員仲間が、先輩後輩を超えて、チーム一丸となって、それぞれの課題に向かって問題解決に走る時ではないでしょうか。

学校文化の伝承

三河教育研究会副会長
幸田町立幸田中学校長

伊藤 映 充



ています。仏様のようにはいきませんが、少しでも近づきたいと、いつもこの本を手元に置いてきました。

大村はま先生の書かれた「灯し続けることば」の一節に「仏様が、ちよつと指で車に触れられました」があります。道端のぬかるみに荷車がはまり、抜け出せないで懸命に引つ張っている男の人の様子をしばらく見ていた仏様が、ちよつと指で荷車に触れるとぬかるみから出られたというお話です。「もし仏様のお陰だと男が知ったら、ひざまずいて感謝したでしょう。それも喜びだと思えますが、男が一人で生き抜いていく力にはならないでしょう。一人で生きていく自信、真の強さにはつながらなかったのではないかと思います。」と大村先生はつづつ

本校は平成二十九年に創立七十一年目を迎え、歌い継がれてきた全校合唱曲「明日へ」から「輝くために」に挑戦し、文化祭で保護者、地域の方々に披露しました。七十年の節目を終え、新たな一歩を踏み出すために、昨年度の後半から二年生主任を中心に動き出しました。音楽の先生に候補曲を数曲選んでもらい、その中から生徒が選ぶと思われる「輝くために」を、どのようにして仕上げていくか考えました。五月の修学旅行で東京に出向く際に、作曲者の若松敏先生に直接ご指導を頂くことで、三年生が一、二年生を引つ張っていく原動力になるという見通しを立てました。五月半ばに指導を受けるためには、それまでに学年合唱の形になっていること、若松先生とアポイントを取ることで、二〇〇名が入れるホールを都内で確保すること、何よりも生徒がこの曲を選んで若松先生に直接指導を

受けたいと思うようにすること等、準備は大変だったと思います。

こうして準備を進めている時、昨年度末の「三年生を送る会」の最後に、三年生から一、二年生へ会のお礼として「進め幸中」というエールが送られました。

創立七十年を意識して取り組んできた三年生が、七十一年目に向けて進み出すよう応援してくれたのです。このエールをよい機会ととらえ、生徒会へ次年度に挑戦していけそうなこと、挑戦していきたいことを考えるよう働きかけ、全校合唱への挑戦につなげていきました。

生徒にさせたいこと、こうなってほしいと願うこと、その気にさせる機会を逃さないこと等の準備は大変努力のいることですが、こうした意図的な取組が教育には必要だと思えます。「新しい曲に挑戦しよう」と呼びかければ済んでしまうことですが、あえてそうしないで「挑戦したい」という思いをもたせることを大事にしたいと思うのです。

小学校勤務の頃（二十年程前）のことですが、机間支援中にごみが落ちていたり拾ってごみ箱に入れていました。教室が汚れているのは嫌だったからです。すると、拾ったごみを「捨ててきます」と手を差し出す子が出てきました。「授業中だからいいよ」と、ごみは手渡さず自分で入れました。廊下で同じような場面

があったときには「ありがとう」と言って手渡すこともありました。ある時、消しゴムの消しきずを机の角に集めている子を見つけました。授業が終わるとその子は、集めた消しきずをごみ箱に捨てました。そのことを帰りの会で子ども達に紹介すると、消しきずを机から払い落とす子が激減しました。教室がきれいであつてほしいと願うのは、教師として当たり前のことです。拾ったごみを受け取って片付けてくれる子も嬉しいですが、気付けて拾える子になってほしいと私は思っていました。それ以上に驚いたことは、汚さないようにしてくれた子の存在です。何気ない心配りのできる子を少しでも多く育てたいと感じた思い出です。

今、働き方改革が大きく取り上げられています。教員の労働時間が話題になっています。時間を気にしては教育の機会を逃してしまうという場面が、現実的には多くあります。教員も労働者であることは確かですが、その前に、教育者の道を自ら選んだという原点だけは見失いたくないと思っています。

学校教育は学校文化の伝承であり、下級生に憧れる上級生の存在が欠かせません。一生懸命な姿、気付きのできる行動を上級生が示し、それに憧れ、目標にし、乗り越えようとする学校教育の文化は、これからも続くものと信じています。

三河の文化を訪ねて

第110回

立一 煎茶文化のふるさと八橋 八橋（方巖） 売茶翁

知立市立竜北中学校教頭 中野俊昭



売茶翁肖像画(無量壽寺所蔵)

平安時代、伊勢物語第九段（通称・東くんだり）で、おとこ（在原業平とされる）が美しく咲き乱れる杜若かづつばたを見て、「かきつばた」の五字を各句の頭において歌を詠んだことで知られる八橋（現在の知立市八橋町）は、平安時代以降も多くの旅人が訪れ、数々の紀行文、旅日記や浮世絵等に登場する名勝地であった。現在も、杜若の咲く八橋（無量壽寺）は全国的に有名で、盛りの五月頃になると観光客でにぎわっている。



現在の無量壽寺かきつばた園



高遊外売茶翁肖像画(高取友仙庵所蔵)

○五年）にこの地を訪れた。しかし、当時の八橋は、伊勢物語に詠まれた情景とかけ離れており、荒廃していた。それを憂えた八橋売茶翁は、八橋再興に努めた。現在の八橋があるのも八橋売茶翁の功績が大きいかは言うまでもない。

平成二十九年は、八橋売茶翁の没後百九十年にあたり、改めてその生涯と功績を振り返る。

一 初代売茶翁との出会い

八橋売茶翁（名は方巖、字は祖永、曇熙、号は売茶翁）は、宝暦十年（一七六〇年）に筑前の国に福岡藩主笠原四郎衛門の三男として生まれた。しかし、幼少期になったころ、笠原家は不幸の連続であった。両親が亡くなり、若くして兄弟姉妹すべてが十年足らずのうちに順に亡くなった。また、大雨・洪水・干ばつなどの天災が続き、村の救済のために甚大な被害をこうむることになった。

その後、久世家の養子となり、十八歳頃に長崎黄檗宗崇福寺に身を寄せることとなった。ここでは、僧の修行の傍ら、

同地に設けられた唐人屋敷への出入りを許されたことから中国清国の文化に触れ、書・詩・音楽を学んだとされる。

二十七歳頃に上京し、臨濟宗妙心寺に入山すると本格的に禅僧としての修行を始めた。修行中に売茶流煎茶道を確立した高遊外売茶翁（初代売茶翁）の旧習にとらわれない奇想天外な生き方に感銘を受け、その門人である相国寺の大典禅師から売茶流煎茶道を習い、印可いんかを受ける。

初代流祖の高遊外売茶翁は、京都東山で禅の教えを説きながら生活の糧を得るために茶を売る生活を始める。高遊外売茶翁の売茶生活の方法は、移動茶店ともいうべきもので、自分の力で担える程度の煎茶道具を担って、京都洛中洛外の景勝地を選び、季節に応じてあちらこちらに茶具を運び、茶を煎じて売ったのであった。

高遊外売茶翁と八橋売茶翁は、生きた時代が異なる。高遊外売茶翁は大典禅師に売茶流煎茶道を伝授して印可を与え、八橋売茶翁は大典禅師から高遊外売茶の流を学び、その奥義に達したという。

二 江戸で煎茶を売る

寛政の末頃（一七九六年頃）、三十七歳の八橋売茶翁は、仏道修行のためか、江戸に出て梅谷（現上野付近）に住む。そのかたわら茶店を開いて道行く人に茶を施したり、上野寛永寺に参詣する人たちに煎茶を接待したりして、その志によって生活を始めた。上野寛永寺は、日増しに参拝者が増し、境内に日毎茶笈を背負ってくる八橋売茶翁の売茶行為は、多くの人々の注目するところとなった。また、上流社会の人たちや文化人との交流も多くなり、招待を受けて江戸付近の各地を遍歴したりして、煎茶道を広めた。



愛用の竹製茶笈
(無量壽寺所蔵)

三 江戸から八橋へ

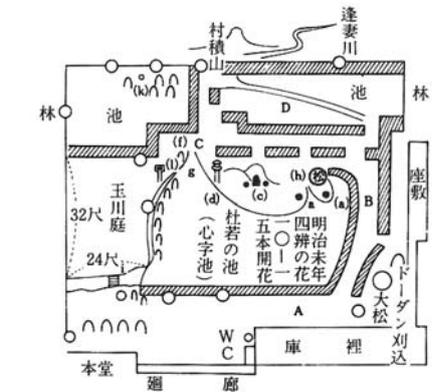
ようやく江戸の内外に名が売れ出した四十六歳の春、八橋売茶翁は、一つの茶笈を背負って江戸をあとに飄然と旅に出た。性来からの煙霧癖からか、文化人との交流の中で、「伊勢物語」等を読み、業平の故地三河八橋への思慕が生じたのか。九月二十二日に池鯉鮒（知立）八橋に入った。しかし、その頃の八橋は、一休



竹製茶笈に納められている茶道具(無量壽寺所蔵)

禅師の『関東咄』にもあるように「音に聞く 三河にかけし 八橋も 田ばかりありて かきつばたなし」で、在原業平の昔をしのぶ姿はなかった。在原寺も無住で荒れはてていた。

そこで、しばらく八橋に留まり、まず在原寺を再建することを、庄屋彦五郎に願っていた。数年にして浄財は集まり在原寺を再興すると、今度は無量壽寺の再建を村人から頼まれた。在原寺の住職を弟子に譲り、無量壽寺に入り、「杜若社中」という講を作って各地を遍歴し、資金集めにかかった。全国の人々の協力を得て、無量壽寺本堂の改築と庭園の改良を手がけた。杜若を植えて「杜若池」をしつらえ、煎茶庭園としての「玉川庭」を隣に設け、庭全体に高低の落差があるため、一の段、二の段ごとの境を赤目檜



八橋かきつばた庭園図 (知立市史中巻)



三河国八橋山無量寺紫燕山在原寺八景之図
(知立市歴史民族資料館所蔵)

等で区切り、合わせて四段の変化ある回遊式に改めた。一番手前の心宇池には、中の島があり、築山となって中腹に三尊石、左に滝見灯籠、右手には不動岩を仕立てて、杜若池全体の要となした。文化十一年（一八一四年）、本堂、庭園とも

に復興された。そのかたわらで、「茶の十徳」を村民に説き、煎茶道の心と効用を教え、茶葉を栽培させて普及を図った。（庭園は、明治四十四・五年頃に改造され、昭和四十五年に新庭園が造成されて、現在の姿になっている。）

その後も、各地を訪れて無量壽寺の再興に向けた寄進勧誘を続け、八橋売茶翁に魅せられて多くの人が無量壽寺を訪れた。その一人として、文政五年（一八二二年）に紀州藩代第十代藩主徳川治宝が訪れた。治宝は、八橋売茶翁が茶を煎じると大変気に入ったようで、和歌山に招き、その際に、無量壽寺の山門額「通僊閣」の書を授けた。

八橋売茶翁六十七歳、北陸方面へ最後の旅に出る。翌年末には江戸に入り、徳



額「通僊閣」徳川治宝書 (無量壽寺所蔵)

川治宝の江戸屋敷に召されるが、体調不良に陥る。そして、業平ゆかりの地八橋無量壽寺に戻ると、文化十一年（一八二八年）二月五日、六十九年の波乱に満ちた人生の幕を閉じた。



八橋売茶翁の墓(無量壽寺)

四 売茶翁の業績を引き継ぐ

八橋売茶翁の煎茶の教えを引継ぎ、八橋で印可を受けた友仙窟ゆうせんくわが初代家元となり、大正初年に名古屋市の浄元寺に移って、「売茶流煎茶道」を確立した。現在、四代家元へと引き継がれている。

そして、八橋売茶翁ゆかりの知立市では、今から十年前の平成二十年、八橋売茶翁没後百八十年祭の折、当時の市長と家元の「若い世代にも煎茶道の継承を」という願いを受け、市内の三中学校の茶（華）道部が、「売茶流煎茶式」を学ぶこととなった。毎年、賣茶流中学煎茶クラブの方々が、三中学の部活動指導にあたっている。そして、平成二十一年から毎年八月に、知立市文化会館の茶室にて三中学合同茶会を開くこととなり、茶（華）道部の生徒たちが市民にお点前を披露し、煎茶を振舞っている。

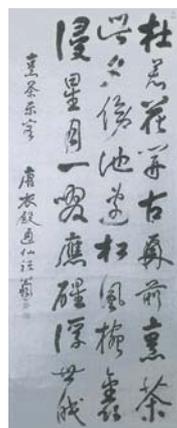


知立市合同煎茶会
(知立市文化会館)



売茶流煎茶の指導を受ける茶華道部
(竜北中)

杜若の花は開く古殿の前
茶を煮る此の夕べ池の辺に傍う
松風の袂裏に星月を浸し
一啜して底に醒すべし浮世の眠り



八橋売茶翁の書(無量壽寺蔵)

西暦		年齢		八橋売茶翁年譜
一七六〇	一	一七六〇	一	
一七七七	一八	一七七七	一八	両親、兄弟姉妹がすべて亡くなり、長崎黄檗宗崇福寺に身を寄せる
一七八六	二七	一七八六	二七	京都臨濟宗妙心寺に入る
一七九六	三七	一七九六	三七	江戸寛永寺近く梅谷に住む
一八〇五	四六	一八〇五	四六	九月二十二日の旅の途中、八橋に至る
一八〇六	四七	一八〇六	四七	寺社奉行に在原寺再建の願書を提出
一八〇九	五〇	一八〇九	五〇	在原寺を再興、住職となる
一八一	五二	一八一	五二	無量壽寺再興をはかる
一八一二	五三	一八一二	五三	東美濃を遍歴する
一八二二	六三	一八二二	六三	在原寺より無量壽寺に移る
一八二六	六七	一八二六	六七	徳川治宝、八橋訪問
一八二七	六八	一八二七	六八	徳川治宝より「通儒閣」の書を賜る
一八二八	六九	一八二八	六九	北陸地方をめぐる 江戸に入る 一月徳川治宝の江戸邸訪問 二月五日病没



知立市合同煎茶会を終えて4代家元（前列左から3人目）と
(知立市文化会館)

参考・引用文献

- 永田友市著『方巖売茶と「独健帳」』
- 『知立市史上巻・中巻』
- 『八橋売茶翁百五十年祭記』
- 知立市文化協会
- 平成二十年度特別展『八橋無量壽寺』
- 伊勢物語と方巖売茶
- 知立市歴史民族資料館
- 企画展『八橋売茶翁 没後百九十年』
- 知立市歴史民族博物館
- 取材協力・写真提供
- 無量壽寺 住職
- 高取友仙窟 浄元寺住職
- 知立市歴史民族資料館

平成二十九年 度

かきぞめコンクール



本法人が刊行している「かきぞめ手本」を題材にして、第七回かきぞめコンクールを行いました。三河地区から、小学生二、七七三点、中学生四四三点、計三、二一六点の作品が寄せられました。

書家・編集委員の先生方によって慎重に審査され、最優秀賞九点、優秀賞一八点、佳作六三点、入選一八〇点が選ばれました。(左頁入賞者一覧表参照)

二月三日(土)・四日(日)、三河教育会館で入賞作品を展示するとともに、四日には表彰式を開催しました。



表彰式記念撮影

最優秀作品の紹介

本年度のかきぞめコンクールで、最優秀賞を受賞された九名のみなさんの作品を紹介します。

〔小学生の部〕

豊田・駒場小学校

一年 山田 晴

一年やまだはる
おばあちゃんとき
さかゆをつくります。
トントンと、なすなを
小さくきりました。

西尾・吉田小学校

二年 平山 凜香

二年平山 凜香
お寺でじよ夜のかね
をつきました。帰り道
の空に、オリオンざの
星が光っていました。

けんこう
三年 米津 基

安城・里町小学校

基

友と学ぶ
四年 浅井 優花

西尾・一色南部小学校

四年 浅井 優花

春の大地
五年 椎葉 芽生

豊田・元城小学校

五年 椎葉 芽生

希望の道
六年 伊藤 佑華

豊田・挙母小学校

六年 伊藤 佑華

〔中学生の部〕

強い信念
三年 米津 和

安城・東山中学校

一年 米津 和

天地創造
二年 井下 凜々花

豊田・末野原中学校

二年 井下 凜々花

生命の尊重
三年 深津 萌絵

豊田・末野原中学校

三年 深津 萌絵

講評

「かきぞめ手本」編集委員長

豊田市立下山中学校長 野田 靖

審査に参加させていただき、出品作品のレベルの高さに驚きました。紙に向かった時の皆さんの心意気が伝わってくるようで、優劣をつけるのにとでも悩みました。コンクールですので、お手本に忠実で、字形が整っていることを一番大切にしました。

一、二年の硬筆作品は、力強く、のびのびと書かれたものに心をひかれました。三年以上の毛筆作品では、楷書も行書も点画を意識し、始筆から運筆、終筆と、気持ち切りをスムーズよく書かれたものが選出されました。名前の大きさと作品とのバランスも考慮しました。

かきぞめでは、自分の心と向き合うことも大きなねらいです。心を込めて書いた文字には、人の心を動かす力があります。次年度も、多くの力作を期待します。



平成29年度かきぞめコンクール入賞者（最優秀賞・優秀賞・佳作）一覧

	小1年	小2年	小3年	小4年	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
最優秀賞	豊田・駒場小 山田 晴	西尾・吉田小 平山 凛香	安城・里町小 米津 基	西尾・一色南部小 浅井 優花	豊田・元城小 椎葉 芽生	豊田・挙母小 伊藤 佑華	安城・東山中 米津 和	豊田・末野原中 井下凛々花	豊田・末野原中 深津 萌絵

優秀賞	豊田・野見小 村瀬 朱音	愛教大・附属岡崎小 杉浦 暖	豊田・梅坪小 初田 桃花	豊田・駒場小 山田 柊	豊田・挙母小 浦浜恵里華	豊田・堤小 石川 諒一	岡崎・竜南中 内田 壮祐	豊田・崇化館中 稲垣 美紅	豊田・崇化館中 浦野芽公美
	西尾・矢田小 丸林 悠華	西尾・八ツ面 古橋 弥怜	安城・作野小 中村 琉菜	安城・里町小 浦野はづき	西尾・一色西部小 長田 昇大	安城・安城北小 中原 愛彩	安城・東山中 市川雄一朗	豊田・豊南中 竹平 有那	豊田・豊南中 平松 千波

佳作	岡崎・梅園小 鈴木 咲結	碧南・大浜小 加藤 煌々	豊田・青木小 山田菜生美	豊田・梅坪小 田中 那樹	碧南・西端小 前多衣良華	碧南・新川小 犬塚 琉理	豊田・朝日丘中 渡邊 暖花	豊田・朝日丘中 早川 百花	碧南・東中 土谷日真梨
	豊田・梅坪小 西岡 栞音	豊田・野見小 高島 悠生	豊田・梅坪小 小野 爽	豊田・朝日小 中村 栞	碧南・西端小 味元あずな	豊田・朝日小 河合 最愛	安城・明祥中 秋田 依里	豊田・高橋中 大谷 莉沙	豊田・崇化館中 古澤 伶奈
	豊田・寺部小 石王 葵	豊田・山之手小 窪田 優惠	豊田・寺部小 松村 伊吹	豊田・浄水小 寄田 実花	豊田・中山小 井上 侑来	豊田・寺部小 深堀 侑里	安城・東山中 天野 凪	豊田・末野原中 子林 遥奈	豊田・高橋中 藤田 彩花
	豊田・東山小 金丸 愛菜	安城・三河安城小 小島 縁和	豊田・前山小 上條 怜央	豊田・東山小 荒木さくら	豊田・挙母小 稲垣 明泉	豊田・浄水北小 川崎ほの香	安城・東山中 石田 りさ	豊田・末野原中 橋本 佳歩	豊田・上郷中 西村 美紅
	豊田・大林小 渡辺 翔真	西尾・一色南部小 浅井 咲季	豊田・若林東小 久野陽奈花	豊田・前山小 鷲野 眞歩	豊田・堤小 沼崎 千昂	豊田・竹村小 青井あやな	安城・東山中 岩月 都美	豊田・末野原中 畑田 桃花	豊田・浄水中 國長 夏汀
	みよし・三好丘小 鈴木 琉未	みよし・三吉小 宮崎 一穂	安城・里町小 早瀬ひより	豊田・若林東小 大口 乃愛	安城・安城北小 天野 芽	豊田・若園小 中崎 紗良	安城・安祥中 築山 真衣	西尾・一色中 前田 涼華	西尾・西尾中 青山 涼
	幸田・深溝小 原田 頼杜	みよし・三好丘小 井手 敦乃	西尾・一色東部小 豊田 花乃	安城・安城北小 田中 脩登	西尾・一色東部小 北村 百絵	西尾・一色南部小 池田 妃那	みよし・三好丘中 渡辺 葉月	蒲郡・形原中 新谷 亜奏	私立・聖霊中 渡邊 奏萌

※ 入選者の氏名は、愛知教育文化振興会ホームページ (http://www.bunsin.org) に掲載されています。

新規事業

体験活動をはじめました!

ネイチャーウォッチングに参加して

子どもが昆虫好きでトンボの季節にはいつもトンボを追い回しているの、いつも採れないトンボが採れると思いついて参加しました。最初の座学ではトンボは天気が良いと出てこない事、光を背にして飛ぶことを初めて知りました。トンボの祖先の話も初耳で興味をそそられました。当日は天気が良くな



トンボ博士

高浜市立高浜小学校 4年 芝 宗寿



僕は昆虫が大好きです。家の周りでセミヤトンボ、チョウをいつもとっているの、網の使い方は誰にも負けない自信があります。今回ネイチャーウォッチングに参加して、いろいろなトンボの種類を知ることができました。トンボの祖先のメガネウラのことやキイトトンボ、カワトンボやシオトンボなどいつも見ないトンボばかりでトンボ博士になった気分です。この日は天気が悪くてモノサシトンボ9匹しか捕まえることができませんでしたが、今度ここに来るときにはもっとたくさん捕まえたいです。

くトンボがあまり飛んでいませんでしたが、茂みに隠れているトンボを探してモノサシトンボをたくさん捕まえることができて参加して良かったと思います。次回も昆虫を採ったり自然に触れる機会があれば参加させて頂きたいと思っています。

(保護者 芝 健史郎)

自然に触れることの大切さ

田原市立伊良湖岬小学校 3年 小久保 樹希



ぼくは、ネイチャーウォッチングに参加して、たくさん種類の鳥がいることにびっくりしました。今回見た場所は、いつも家族と車で通っているところです。でも今まで、こんなに鳥がいるなんて全然気づきませんでした。鳥について教えてもらったり、双眼鏡でこまかく鳥を見たりして、鳥のことをもっと知りたくまりました。自分が住んでいるところにこんなにすごいところがあって、うれしかったです。

参加させていただき、本当にありがとうございました。はじめは、興味をなさそうだった子どもたちの表情が、たくさんの種類の鳥を見るうちに、いきいきとした表情に変わっていくのがわかりました。インターネットでも調べられる時代ですが、実際に自然に触れることの大切さをあらためて実感しました。

(保護者 小久保 陽子)

来年度も開催!

ネイチャーウォッチング

平成30年7月~平成31年1月(予定)

- ① めざせ 虫博士
- ② 川の生き物調べ
- ③ 干潟の鳥をウォッチング
- ④ 化石を発掘しよう
- ⑤ 星座ウォッチング



詳細はHPをご覧ください(4月に掲載予定)
<http://www.bunsin.org>



今、「いのち」の大切さを、
どのように学ばせていますか？

いのち

A4判 各290円(税込)

- 教育の根幹に関わる「いのち」の大切さを計画的・系統的に指導できます。
- 子どもがより学習しやすいように工夫してあります。
- 養護教諭も編集に携わっています。



Check こんな所がかわりました！

1 「ほけん」の教科書と併用しやすいように編集を工夫(事前・事後指導にも活用)しました！

	いのちの主題名 (3・4年)	教科書 A社 (3・4年)の単元名	教科書 B社 (3・4年)の単元名	いのちの主題名 (5・6年)	教科書 A社 (5・6年)の単元名	教科書 B社 (5・6年)の単元名
1	きそく正しいリズムで生活しよう1(3年)	けんこうな生活とわたし	けんこうというたからもの	心と体はつながっている(5年)	心の発達	自分の考え方や行動
2	きそく正しいリズムで生活しよう2(3年)	けんこうな1日の生活のしかた	けんこうによい1日の生活	みんなで解決 こんなときどうする？ (5年)	心と体のつながり	不安や悩みと体の調子
3	調べてびっくり 身長のび方(4年)	大きくなってきたわたし	大きくなってきたわたし	めざせ！ ミニ救急隊(5年)	不安やなやみをもったとき	不安や悩みの解消方法
4	おとなに近づく わたしたち(4年)	おとなの体になる じゅんぴ	思春期にあらわれる 変化	体のていこう力(6年)	学校生活や地いきでの けがの防止	けがを防ぐために
5	3つのパワーで すくすく育て！(4年)	よりよく成長するために	よりよく育つための生活	エイズを知ろう(6年)	病原体がもたになって 起こる病気の予防	病原体の種類と予防
6				生活習慣病予防(6年)	生活のしかたがかわって 起こる病気の予防	生活習慣と病気
7				たばこの害(6年)	たばこの害と健康	虫菌の予防
8						たばこの影響

2 学級活動で活用できるように資料や内容を充実しました！

- ★1・2年… 性教育の手はじめに活用を
「おへそのひみつ」「ほく・わたしが生まれたとき」
◎保護者への聞き取りや事前調査など親子で取り組めるように配慮
- ★3年…… ロールプレイングを取り入れた授業を
「男女なかよく」 ◎自分の本音が出やすいように授業展開を工夫
- ★4年…… 保護者を巻き込む授業参観などで活用を
「はばたこう！未来に向かって ～1/2成人式に向けて～」
◎保護者への依頼文の見本などの参考資料を掲載
- ★5年…… 保健と理科の学習内容を関連させた授業展開を
「人のたんじょう」 ◎クイズ形式で学習を構成
- ★6年…… 身近な生活場面を取り入れて
「そんなつもりじゃなかったのに」 ◎ワークシートを有効に活用した授業展開



編集委員会のようす

「大豆の大へんしん」(二年生)

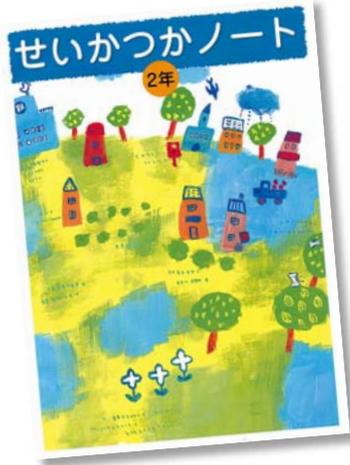
「せいかつかノート」を活用した取組

幸田町立深溝小学校 飯飼 友香

本校は、「しせいよく生きる子ども
の育成」を教育目標に掲げている。生活
科では特に「□しつかり朝ごはん」の、
食べ物の栄養バランスの大切さと、「い
いつもスマイル」の、命や自然を大切に
する心の育成を中心に指導している。

「せいかつかノート」(二年)について

「せいかつかノート」は、低学年の発
達段階に合わせて、罫線の幅や数を工夫
して制作されている。また、「大きく
なったよ」では、植物が上に生長する様
子を描けるように縦書きにしたり、「町
探検」では、町の様子を描きやすいよう
に横書きにしたりするなどの工夫が施さ
れている。さらに、観察の視点をもたせ
るために、感覚のマーク(目・口・鼻・



耳・手・心)を付いたり、授業の感想を
表現しやすくするために、顔のマークを
付いたりしたワークシートで子ども達の
気付きの質を高める工夫もしている。

「大豆の大へんしん」(二年)の実践

本単元の目標の一つとして「大豆の変
化や生長の様子に気付くことができる」
を設定した。

そこで、本単元を通して、大豆の観察
をするときには、五感を使って観察し、
記入ができるように感覚のマークが付い
たワークシートを活用して観察させる実
践を試みた。(資料①)

まず、収穫した大豆の観察を行った。
感覚のマークが付いたワークシートの使
い方を説明し、子ども達が観察するとき



(資料①)

には、手や目などを使って観察するよう
声を掛けた。子ども達もマークごとに気
付いたことを記入できるので、細かなこ
とも書くことができた。次に、観察して
気付いたことを発表した。みんなで意見
の交流をしたことで、自分だけでは気付
かなかったことも新たに知ることができ
、気付きを深めることができた。(資料②)



(資料②)

観察の後、大豆にはどんな栄養がある
のか調べ学習を行った。図書室のその他
家の人に聞いたり、インターネットで調
べたりする子もいた。さらに、栄養教諭
からも話を聞き、質問をすることで、大
豆が栄養豊富で、色々な食品に加工でき
ることから学校給食でも多く登場するこ
とがわかった。大豆製品の「おから」を
観察したときには、積極的に手で触って
繊維をほぐしたり、香りを嗅いでみたり
する様子が見られ、五感を使った観察に
慣れてきたことを感じた。(資料③)

大豆を煎ったり、すったりした時の大
豆の変化には、大きな歓声を上げて「こ
うばしいおいがするよ」「粒が細かく
なったけど、ざらざらだね」「もっと細



(資料③)

かくしよう」等と、おいしいきなこを作
るために活発に話し合いをすることがで
きた。「せいかつかノート」には、絵日
記形式のワークシートもあるので、単元
の最後にきなこ作りの感想を書かせた。
その感想にも五感が生かされている文章
が多く見られ、観察の仕方を身に付ける
ことができたことが分かった。(資料④)

植物の観察から生長や変化に気付く力
を付けるには、観察の視点をもたせ、そ
れを記入できる「せいかつかノート」が
大変有効であった。



(資料④)

平成二十九年 度 「個人研究助成」

（審査を終えて）

本法人では、教育振興の目的を達成するため、個人研究助成を行っています。

この度、平成二十六年 度を研究一年次として、平成二十八年度までの三年間、着実に研究を推進され、提出された十名の先生方の論文の最終審査が行われました。どの論文も三年間の成果が見事にまとめられていました。このうち、三名の先生方の論文が特に優秀として選ばれました。ここでは、審査に当られた白井博司審査委員長の講評の概要とともに紹介いたします。

講評

どの論文からも、ひたすら子どもたちの成長を願って、三年間積み上げてこられた実践研究の重みを感じました。「子どもありき」の精神のもと、実践者の子どもたちにかける情熱が伝わってきます。とりわけ、三河の実践研究らしく詳細な授業記録や学習記録の分析をもとに論述した論文からは、研究の確かさを感じられました。また、「主体的・対話的で深い学び」など、新学習指導要領を意識した実践検証がされていたり、新たな題材、単元を開発したりするなど、現代の課題に果敢に挑む実践研究には、手ごたえとともに将来への期待感を抱きました。

課題としては「仮説に縛られて、窮屈な論文にならないように（仮説より実践が豊かなものに）」「教科特有の見方・考え方を明確にしたい」などがあげられます。今後の参考にしていただければ幸いです。

◆ 三年度個人研究審査結果 ◆

最優秀賞

西尾市立一色西部小学校

稲垣 修一



思いやイメージを豊かに表現し、つくりだす喜びを実感する子どもの育成
〔図画工作〕

優秀賞

知立市立来迎寺小学校

岩田 千瀬



仲間とかかわり合いながら技能を高め運動有能感をもつことができない子の育成
4年体育「ボール投げ 上達への道」、5年体育「50m走 上達への道」、6年体育「走り幅跳び 上達への道」の実践を通して〔体育〕

優秀賞

刈谷市立朝日中学校

菅野 愛佳



数学的な思考力・判断力を高め、数学の必要性を実感する生徒の育成
3年「標本調査」の実践を通して〔数学〕

平成二十九年 度 教育図書出版助成

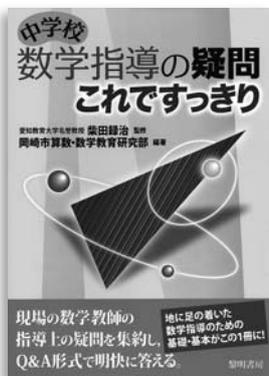
本法人では、教育図書の出版に対して助成を行うとともに、その内容についてお知らせし、教育の振興を図っています。応募対象は、三河の小・中学校教員の個人またはグループ・学校、教育関係団体や保護者の業績をまとめた教育図書で、経費の多くを公費等の援助を受けずに出版したものを対象としています。

今年度は、三点の応募があり、審査会において、それぞれ助成が決定されました。なお、平成三十年 度の応募要項は、愛知教育文化振興会のホームページに掲載されます。

○ 中学校 数学指導の疑問 これですっきり

著者 岡崎市算数・数学教育研究部

B5判 一四四頁 一、三〇〇円



現場の中学校数学教師が授業を進める中での疑問を集約し、Q&A形式で明快に答えました。数学の指導法、ノート指導、板書構成のあり方など、中学校数学指導の基礎・基本が全てこの一冊に凝縮されています。

○ いつでも・だれでも・どこでも NIE

著者 碧南市立西端小学校

B5判 九五頁 一、四六〇円



これからの子ども主体の学びを支えるものとして新聞はまたとない教材です。記事だけでなく、新聞のあらゆる部分を教材にしていけることができます。本書ではNIE授業づくりの基礎・基本と魅力的な授業モデルを豊富に紹介しています。

○ 自らの意思で判断・決定していく子ども

著者 愛知教育大学附属岡崎小学校

B5判 一四四頁 一、八五二円



生活教育の理念のもと、問題解決に向かう子どもに寄り添い、支えていく教師の営みをわかりやすくまとめた一冊です。「主体的・対話的で深い学び」を具現した附属岡崎小学校の授業づくりは、多くの先生方にとって今後の参考になります。

興味・関心の芽を育てる

安城市立桜林小学校

神谷 佳孝

「なんか、想像しただけでわくわくしちゃうな。」

校外学習の事前指導をしていたとき、一人の子どもがにこにこしながらつぶやいた。子どもの素直な気持ちが表れた瞬間である。

校外学習は、市内の公園に出かけた。公園に着くとすぐに、

「あつ、どんぐりがたくさんあった。」と、子どもたちの元気な声が聞こえた。公園でのネイチャーゲームでは、秋の自然に触れ、グループの友達と仲良く笑顔で活動していた。

その後、生活科の時間に、校外学習で拾ったどんぐりで、どんぐりこまを制作した。そして、長く回るこまをつくろうと課題を提示した。子どもたちは、どんぐりの種類やこまの軸の長さを変えて、こまを作り、繰り返し試していた。一人一人が真剣に考えて活動した。こまが回る様子をじっと見ながら、

「小さいどんぐりだと回らないな。」とつぶやく子や

「やった、前よりも長く回った。」

と喜びを爆発させる子もいた。

あるとき、一人の子が、うまくこまが回せずしょんぼりしていた。アドバイスをしてくれる子を募ったところ、次々と友

達からアドバイスが出てきた。

「手をひねりながら回すといいよ。」

「力を抜いて回すといいよ。」

「両手で勢いをつけるといいよ。」

アドバイスをした子どもたちは、黒板の前に出て実演した。視覚的に分かりやすいように、タブレット端末を活用し、こまを回す様子をテレビ画面に映し出した。テレビ画面にこまが勢いよく回ると、子どもたちから歓声があがった。

「あつ、なるほど。そうやってやるのか。」と、子どもたちが次々につぶやいた。うまく回せず困っていた子どもも、目をきらきら輝かせて、

「今の回し方でやってみるよ。」

と熱心にこまを回し続けた。

「〇〇くんが言ったように、ひねりながら回したら、前より長く回せました。」

授業の最後には、晴れ晴れした笑顔で振り返りを発表していた。

子どもたちは、常に興味・関心を持ち、素直な気持ちで授業に臨んでいる。授業を通して、少しずつ成長していく子どもの姿は、何よりも励みになる。今後も一人一人の気持ち

を大切に、子どもたちが成長できるような創意工夫のある授業を実践して、子どもたちの興味・関心の芽を育てていきたい。



温かい風景

豊橋市立東陽中学校

阪口 亜希子

今年度、私は初めて適応指導教室の担当となり、担任として学級をもっていない。担任をもっていないからこそ見える東陽中学校の様々な温かい風景を見させてもらっている。

体育祭のメイン種目であるクラス対抗全員リレーの直前、三年生のA子がこんなことを言った。

「足をくじいたみたいだから走れない。遅くなってみんなに迷惑をかけちゃうから、代走の人に走ってもらおうよ。」

それを聞いたクラスの生徒達は「最後の体育祭だからみんなで一緒に走りたい。みんなで走るから意味があるんだよ。」

と声をかけた。A子は痛い足をかばいながら一生懸命に走った。足をひきずりながら走ったので、他のクラスにどんどん抜かれてしまい、一位はとれなかった。

しかし、A子を含め、クラス全員が笑顔でいっぱいであった。リレーの結果よりも、「クラスのみんなで一緒に走りた」という気持ちを大切にしていてる姿を見て、仲間を思いやる絆が育っているなと感じた。

また、歌の東陽と言われる本校では、歌に関連するドラマも生まれる。生徒達も練習を積み重ねて、自分達の曲を創りあげていく。昼放課や帰りの練習で、指揮者や伴奏者、パートリーダーが中心となりハーモニーをつくっていく中で、それぞれが悩みを抱えることもある。

ある日、一年生の指揮者のB子が「指揮も上手にできないし、みんながこわい顔をして見ていて、指揮をすることができません。」と言った。すると担任の先生は「あなたが笑顔になってごらん。」とアドバイスをした。翌日からB子は笑顔で指揮をするように心がけて、指揮者としてやり遂げた。

「笑顔で指揮をしたら、みんなが笑顔で返してくれた。それが嬉しかった。」とB子は合唱コンクールを振り返った。

行事を通して一人一人の居場所がつけられているなど感じた。

これからも、生徒達の笑顔があふれる学校を支えていきたい。



特色ある教育活動

—「都市教育・研究助成」を生かした取り組み紹介—

「たくましさ」と「かかわる意欲」を育む道徳教育

「考え議論する道徳授業」を軸として

高浜市立高取小学校長 池田 互隆

本校は、高浜市の郊外にあり、五五三名の児童が在籍しています。学校の南側には田が広がり、横を鯉やカルガモが棲む稗田川が流れる自然豊かな環境にあります。本校の子どもたちを「素直で優しく、言われたことは一生懸命に取り組みが多いのだが」と言われることがありました。そこで、「高取っ子の『よさ』を伸ばしながらも、『たくましさ』や『他者と豊かにかかわる意欲』を育みたい」と願い、道徳の授業とそれを支える諸活動を柱として研究助成を生かし、研究に取り組みました。研究は三年前から始め、愛知教育大学大学院教授の鈴木健二先生のご指導を受けています。



道徳の授業では主体的に考え、友だちとの関わる活動を通して道徳的な判断力を育みたいと考えました。そのために、教材を徹底的に読み込み、分析します。児童の実態を踏まえ、その教材ならで

はの価値やねらい、考えたくなる発問、話合いの助けとなる構造的な板書等を吟味・検討し、授業に臨みます。授業では多様な意見を引きだし、深めるために教師が話合いをコーディネートします。議論を深めるため、切り返したり、役割演技をさせて再度問い返したりします。

その道徳の授業を支える活動の一つに「かがやきタイム」があります。かがやきタイムは、週一回、朝の十分間、行います。いわゆる「ミニ道徳」ですが、道徳的な価値に関わるテーマだけでなく「考えることは楽しい」「みんなで話し合うって楽しいな」と感じるものをテーマにします。ある日の五年生は「電車の中での食事は、ありますか」というテーマでした。身近なテーマのため多くの児童が活発に発言しました。途中で考え方に地域差がある資料を提示したため、深まりのある話合いができました。ほかに「生活の中で自動になるといいものは何ですか」のテーマも児童から多くの意見が出され、話合いを楽しみました。

今後も「たくましく、他者と豊かに関わる」高取っ子を目指し、道徳の授業や諸活動の研究を重ねたいと考えています。

伝えたい・聞きたい思いをふくらめ

のびのびと学び合う子ども育成

—「聞く」「話す」活動を生かした「わくわく授業」づくり—

みよし市立南部小学校 小澤 知里

みよし市にある本校は、全校児童三百七十九名の中規模校です。平成二十八年・二十九年に市の研究指定を受け中部大学の小笠原豊先生を指導者に迎え、「伝えたい・聞きたい思いをふくらめ」のびのびと学び合う子どもの育成—「聞く」「話す」活動を生かした「わくわく授業」づくり—のテーマで授業研究に取り組みました。

本校の考える「わくわく授業」では、子どもたちを二種類の「わくわく」に導くことをめざします。一つ目は、課題と出会う段階で「面白そう、なぜだろう、やってみたい」と感じる「外的わくわく」という状態で、課題追究の意欲を高め、二つ目は、課題追究の段階で「わかった、できた、伝えたい、聞きたい」と感じる「内的わくわく」という状態で、授業のねらいに迫らせます。

そのような「わくわく」のある授業をつくるために、様々な取り組みをしてきました。

まず、二つの「わくわく」を軸にした、「一時間の基本的な流れ」を決めました。基本を示したことで、誰もが安心して「わくわく授業」づくりに取り組むことができました。

「わくわく授業」では、課題の追究段階で、話し合いによる学び合いを行います。そこで、週一回、スピーチ、テーマトークなどを行い、話す・聞く力を高める「ことばスキルタイム」を設けました。また、水曜朝の「そよかぜタイム」では、詩の音読をして声を出す楽しさを味わっています。

「わくわく授業」づくりでは、指導案の検討、模擬授業など職員の学び合いも大切にしました。全校の研究授業では、小笠原先生も指導案の検討や模擬授業に立ち会って共に議論し、ご指導いただきました。授業をつくる楽しさを教えていただくことができました。

十月二十七日の研究発表会では、「わくわく授業」に目を輝かせる子ども姿が多く見られました。しかし、「教師の出」が曖昧で話し合いの深まりが不十分など課題も明らかになりました。今後も、研究助成を活用して、「わくわく授業」を追究していきます。



学校教育ボランティアグループ活動紹介

地域に響く子どもたちの声

碧南市立中央小学校 学校・地域協議会

碧南市の中央に位置する本校は、昭和五十二年、近隣マンモス校の解消を図り、開校しました。現在は、全校児童六百十五名の中規模の学校です。

『学校・地域協議会』は、平成五年、地域の子どもを地域の大人が育てる「地域の教育力」が話題になりかけた頃、立ち上げられました。

子どもが、環境美化（資源回収）活動を進んで地域に貢献する姿は、地域と学校の繋がりを強くしています。

「おはようございませう。ただ今、資源回収を行っています。御用があれば、声をかけてください。」と、リヤカーを引きながら、学校周辺で活動する子ども。

「ありがとう。いつも精が出るね。助かるよ。」と、玄関を開けながら、声をかけていただける地域の方。

「来月は、いつやるのかね。それまで溜めとくね。」「家は仕事の関係でダンボールがたくさん出るから、取りに来てね。」と、協力的な方が多い。

夏の暑い日は飲み物、秋にはミカン等差し入れをしていただ



ける方もいる。

また、資源の回収場所では、子どもは、車で持ち込んでくださる方に、「ありがとうございませう。」と言



い、資源と一緒に笑顔を送っている。

暑い夏は、身も心もすがすがしくなり、寒い冬は、温かくなる。参加者全員が心地よい二時間を過ごしている。

【活動日時】

奇数月の第二土曜日 九時～十一時

【主な参加者】

学校・地域協議会員、一般ボランティア、教職員、ブラス・合唱・バトンの児童とその担当顧問

【回収物】

新聞紙、雑誌、ダンボール、アルミ缶、牛乳パック、布

【資源回収の範囲】

中央小学校学区

【収益の利用】

ブラス・合唱・バトン部の活動を始め、本校の様々な教育活動に活用させていただきます。

(碧南市立中央小学校長 深津 研一)

行事予定(三月～六月)

- ・三月一日(木) 「教育と文化」一一六号発行
- ・四月二十日(金) 第一回文振郡市正副代表者会
- ・四月二十五日(水) 第一回文振郡市事務担当者会
- ・四月二十七日(金) 個人研究助成(2年次・3年次)申請書提出締切
- ・五月十日(木) 監査会
- ・五月十四日(月)～十七日(木) 第二期刊行物注文
- ・五月十六日(水) 第一回理事会
- ・五月二十五日(金) 団体研究助成申請書提出締切
- ・五月三十一日(木) 学校教育ボランティアグループ助成申請書提出締切
- ・六月一日(金) 第一回評議員会・臨時理事会
- ・六月十三日(水) 文振新任式
- ・六月十三日(水) 第一回編集委員長会
- ・六月十四日(木) 出版・印刷各社との打ち合わせ会
- ・六月十五日(金) 個人研究助成(1年次)申請書提出締切
- ・七月一日(日) 「教育と文化」一一七号発行

編集後記

◇三月となり、卒業のシーズンを迎える頃となりました。卒業文集の部活動の思い出に心を打たれます。教育情報誌「教育と文化」一一六号をお届けいたします。本号も執筆者の皆様からの玉稿をお寄せいただき、感謝申し上げます。

◇「巻頭言」と「三河教育への提言」では、三河教育の誇りと継承、今後新たに研究を深めたい「言語能力を培う」「問題解決能力を高める」「広く深く学ぶ」の視点を示唆いただきました。

◇中野俊昭様には、深いご造詣により郷土の偉人「煎茶文化のふるさと八橋(方巖) 売茶翁」をご紹介いただきました。煎茶道が中学生に引き継がれ、文化の継承の確かさを知ることができました。

◇第七回「かきぞめコンクール」の作品展を、初めて三河教育会館で開催しました。その結果を本号に紹介したので、ご覧いただき今後役に立てただけければ幸いです。また、個人研究助成、教育図書出版助成の結果も掲載しました。来年度も多くの先生方の応募をお待ちしています。

◇本年度、新規事業の体験活動「ネイチャーウォッチング」を開催し、大変好評でありました。来年度は五回の開催を予定していますので、たくさんのご応募をお待ちしております。また、新しく「絵画コンクール」を開催することになりました。ホームページをご覧ください。

(編集部)